岩渕功一編

『越える文化、交錯する境界
—トランス・アジアを翔けるメディア文化—』

（2004年、山川出版社）

評者：山脇千賀子*

《構　成》

序　章：方法としての「トランス・アジア」
岩渕功一

Ⅰ　越えるつながり、越えない文化

第一章　「日本偶像劇」と錯綜するアイデンティティー
—台湾における日本製テレビドラマの消費
伊藤　守

第二章　「犬はあなたで、犬はわたし」
—アニメ『フランダースの犬』の旅をめぐって
清水知子

第三章　タイの歌はきこえてくるか？
—ポピュラー音楽流通の非対称性をめぐって
松村　洋

Ⅱ　ナショナル化されるトランスナショナル

第四章　東アジア・テレビ交通のなかの中国
—韓国と台湾の番組を中心に
青崎智行

第五章　「韓国マンガ」という戦略
—グローバリゼーション・「反日」・儒教文化
山中千恵

Ⅲ　内なる「越境アジア」

第六章　円環の外へ
—映像にみるアジア・沖縄へのまなざし
田仲康博

第七章　「在日音楽」という想像力
—コリアン・ジャパニーズ・ミュージックの（不）可能性から、音楽が「在日」することへ
東　琢磨

第八章　ベトナム系住民とディアスポリック・メディア消費
—越僑社会の文化交通とポピュラー音楽
日吉昭彦

あとがき

《書　評》

本書は、国際交流基金アジアセンター企画アジア理解講座『アジアを交錯するメディア文化』の各講演をもとに編まれている。各章のタイトルからも見て取れるように、扱われている主なメディア・ポピュラー文化の題材は、テレビドラマ・番組、アニメ、映画、音楽、マンガなどである。こうした人々の生活に密着した題材を通してアジアを理解しよう、というのが講座の眼目であっただろうことは容易に理解できる。日本の官公庁関係機関・地方自治体や大学などが主催する「異文化理解講座」は、市民の異文化リテラシーを高めることを目的としている。そして、そのことにより、私たちの日常的かつ無意識な地域・国家に対するイメージを再固定化・強化する役割を果たしていることには、かなり無自覚である。

しかし、方法としての「トランス・アジア」を掲げる本書のスタンスは、アジアを日本に対置して「ゲットー化」して理解しようとするような従来型発想に批判的だ。本書の読者の大部分を占めるだろう日本人に対して、「あなたがその一部を形成している文化を異なる切り口から見てみよう」と呼びかけている。「アジア」や「日本」を閉じた社会空間として前提せずに、さまざまな人やモノや文化が越境して交錯する開かれたネットワークから浮かび上がる可変的な

＊国際学部准教授

何ものか、として理解してみようという取り組みだということができるだろう。地域という概念を、地域という枠組みにとらわれずに把握する、というアクロバティックな試みといえようか。本書は、そういう意味で既存の知的枠組みに根本的な改変を迫る問題提起の書である。

「アジア」というローカルな地域にこだわりながらも、同時に、グローバル化がもたらしているダイナミズムへの目配りが必要不可欠であることは、メディア文化を研究対象としている人々にとっては当然のことだろう。そのため、ともするとメディア文化研究はいわゆる先進国発多国籍メディア企業のグローバル化における圧倒的な影響力に目を奪われがちなのだが、本書ではあくまでもグローバルとローカルの関係を相互構成的なものとして位置づけようとしていることは重要なポイントであろう。本書のそれぞれの章は、グローバル化の力学のもとローカルな場でさまざまな主体が交渉している過程を精緻に検証する、という使命を帯びて書かれたものであることが読んで取れる。

また、メディアに提供される情報の消費者の多くが、自らの自己・他者認識パターンに無自覚であるのに対し、メディアは非常に自覚的に国家･民族などの枠組みを利用して消費を煽っている主体であることにも目を向ける必要がある。トランスナショナルな動きがナショナルな境界を消滅させるだろうというような単純化ができず、むしろ再設定化するような一見矛盾する構造が、今日のメディア文化をとりまく状況に組み込まれている。本書の随所にそうした具体例の分析が描かれている。

さらに、特に1990年代なかば以降、東･東南アジアでも域内でのメディア文化の越境･融合がそれまで以上に活性化しているが、他方でこうした消費主義の枠組みからはずれた文化が排除される傾向を強めていることには危機感をもつべき時期に至ったという認識が、本書の執筆者らに共有されているようにみえる。

以上で要約した「トランス･アジア」という知的取り組みは、正にアジアに閉じ込められるべき方法ではなく、広く世界で起こっている文化現象を理解するのに不可欠なスタンスとして評価されるべきだろう。メディア文化に興味のある人のみならず、グローバル化を研究対象とする人々に広く読まれるべき好著といえよう。

以上